

## 4 健康ながよ21（第1次計画）の最終評価

全92の評価項目の分野別の構成は、「栄養・食生活」が30項目（32.6%）で最も多く、「歯・口腔の健康」が22項目、「身体活動・運動」が11項目等です。

これらの評価項目について、「目標値に達した」（A）が14項目（15.2%）、「目標値に達していないが、改善傾向にある」（B）が18項目（19.6%）と、目標値に達した又は改善傾向は全体の3分の1となっています。一方、「悪化している」（D）が7項目（7.6%）であり、「変わらない」（C）が51項目（55.4%）と半数を超えました。このほか、指標の定義の変更等により評価できないものが2項目（2.2%）です。

### 〔健康ながよ21の最終評価結果〕

	生活習慣	栄養・食生活	身体活動・運動	飲酒	喫煙	歯・口腔の健康	休養	こころの健康	その他	合計	
A	3	2	2	1	1	3	1	1	0	14	15.2%
B	4	4	4	0	1	4	1	0	0	18	19.6%
C	3	22	5	2	2	12	0	5	0	51	55.4%
D	0	1	0	0	0	2	0	2	2	7	7.6%
E	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	2.2%
計	10	30	11	3	4	22	2	8	2	92	100.0%
	10.9%	32.6%	12.0%	3.3%	4.3%	23.9%	2.2%	8.7%	2.2%		

注：「その他」は児童生徒期の「性や命について家族と話し合う者の増加」

「目標値に達した」（A）は、壮年期、高齢期の健診受診率の増加や青年期の喫煙率の減少等で、「目標値に達していないが、改善傾向にある」（B）は、高齢期の地域活動に参加する者の増加や壮年期男性の喫煙率の減少等です。

一方、「悪化している」（D）は、小学生のフッ素入り歯みがき剤利用者の増加や適正体重者の増加ですが、適正体重者の増加についてはローレル指数115未満（やせ傾向）が多かったことによるものです。なお、「変わらない」（C）が多いのは、回答数が評価するには十分ではない項目が多いことも起因しています。また、「中間評価時に新たに設定した指標又は把握方法が異なるため評価が困難」（E）は乳幼児期の卒乳の増加となっています。

### 〔評価の基準〕

区分	基準	備考
A	目標値に達した	目標に達したように見える、かつ片側P値(vs.目標値)<0.05 (本当は目標を達成していないのにAと判定される誤りを5%未満にする)
B	目標値に達していないが、改善傾向にある	改善したように見える、かつ片側P値(vs.ベースライン時)<0.05 (本当は改善していないのにBと判定される誤りを5%未満にする)
C	変わらない	ABD以外 (「変わらない」というのは増加又は減少したとする十分な証拠がないという意味)
D	悪化している	悪化したように見える、かつ片側P値(vs.ベースライン時)<0.05 (本当は悪化していないのにDと判定される誤りを5%未満にする)
E	中間評価時に新たに設定した指標又は把握方法が異なるため評価が困難	そもそも比較できない調査

注：「健康増進施策推進・評価のための健康・栄養調査データ活用マニュアル」（平成23年11月30日版）による

## 「目標値に達した」（A）の主な項目

分野	項目	ライフステージ
【生活習慣】	定期的に受診している者の増加	壮年期
	定期的に受診している者の増加（前期・後期高齢者）	高齢期
【栄養・食生活】	栄養バランスのとれた食事の増加	乳幼児期
	中学生の朝食の欠食率の減少	児童生徒期
【身体活動・運動】	父親との外遊びの増加	乳幼児期
	週2回以上外出する（前期高齢者）	高齢期
【飲酒】	妊娠・授乳中に飲酒をやめる人の増加	乳幼児期
【喫煙】	喫煙率の減少	青年期
【歯・口腔の健康】	しっかり歯みがきする割合の増加（小学生）	児童生徒期
	食後の歯みがき習慣者の増加（中学生）	児童生徒期
	歯科健診受診率の増加	青年期
【休養】	適切な起床時刻の増加	乳幼児期

## 「目標値に達していないが、改善傾向にある」（B）の主な項目

分野	項目	ライフステージ
【生活習慣】	健診結果を把握している者の増加	壮年期
	服薬管理が出来ている者の増加（前期・後期高齢者）	高齢期
	かかりつけ医をもつ者の増加	高齢期
【栄養・食生活】	母乳にとって栄養バランスのとれた食事の増加	乳幼児期
	規則正しい排便がある者の増加（小学生）	児童生徒期
	毎日3食食べる者の増加（中学生）	児童生徒期
	毎食、主食・主菜・副菜を取り入れた食事をする（前期高齢者）	高齢期
【身体活動・運動】	週2回以上外出する（後期高齢者）	高齢期
	地域活動に参加する者の増加（前期・後期高齢者）	高齢期
【喫煙】	喫煙率の減少（男性）※女性は「C」変わらない	壮年期
【歯・口腔の健康】	しっかり歯みがきする割合の増加（中学生）	児童生徒期
	歯間清掃をする者の増加（前期高齢者）	高齢期
	定期的な歯科健診受診者の増加（前期・後期高齢者）	高齢期
【休養】	適切な就寝時刻の増加	乳幼児期

## 「悪化している」（D）の項目

分野	項目	ライフステージ
【栄養・食生活】	適正体重者の増加（小学生）※やせの増加による	児童生徒期
【歯・口腔の健康】	フッ素入り歯みがき剤利用者の増加（小学生）	児童生徒期
	歯磨きする者の増加	高齢期
【こころの健康】	運動によってストレスを解消する者の増加	壮年期
	趣味活動によってストレスを解消する者の増加	壮年期
【その他】	性や命について家族と話し合う者の増加（小学生）	児童生徒期
	性や命について家族と話し合う者の増加（中学生）	児童生徒期

ライフステージ別の評価結果（下表）について、16の評価項目が設定されている乳幼児期では、A「目標値に達した」が25.0%、B「目標値に達していないが、改善傾向にある」が12.5%、D「悪化している」は該当がありませんでしたが、C「変わらない」が56.3%と半数を超えました。

28と最も評価項目が多い児童生徒期では、A「目標値に達した」とB「目標値に達していないが、改善傾向にある」がいずれも10.7%で、D「悪化している」が14.3%と全ライフステージで最大となりました。C「変わらない」は64.3%となっています。

評価項目が7の青年期では、A「目標値に達した」が28.6%と全ライフステージで最も目標達成の割合が高く、B「目標値に達していないが、改善傾向にある」とD「悪化している」は該当がありませんでした。しかし、C「変わらない」が71.4%と全ライフステージで最も多くなっています。

17の評価項目の壮年期では、A「目標値に達した」が11.8%、B「目標値に達していないが、改善傾向にある」が17.6%ですが、D「悪化している」が11.8%と児童生徒期に次いで多く、C「変わらない」が52.9%となっています。

評価項目が24の高齢期では、A「目標値に達した」が12.5%、B「目標値に達していないが、改善傾向にある」は41.7%と全ライフステージで最大で、AとBの合計は54.2%と半数を超えました。一方でD「悪化している」は、【歯・口腔の健康】の1項目（4.2%）で、C「変わらない」は41.7%でした。

#### 〔ライフステージ別評価結果〕

	A	B	C	D	E	合計
乳幼児期	4	2	9	0	1	16
	25.0%	12.5%	56.3%	0.0%	6.3%	100.0%
児童生徒期	3	3	18	4	0	28
	10.7%	10.7%	64.3%	14.3%	0.0%	100.0%
青年期	2	0	5	0	0	7
	28.6%	0.0%	71.4%	0.0%	0.0%	100.0%
壮年期	2	3	9	2	1	17
	11.8%	17.6%	52.9%	11.8%	5.9%	100.0%
高齢期	3	10	10	1	0	24
	12.5%	41.7%	41.7%	4.2%	0.0%	100.0%
合計	14	18	51	7	2	92
	15.2	19.6	55.4	7.6	2.2	100.0